異人秘授五極

［原文］

異人秘授五極

治百病灸五極莫不愈焉。然病機之變有内外表裏之不一。故灸灼亦有之四治之法也。

一日、開表。如臁瘡爲痒陰虫破瓜疥癬殿風小兒白禿、則瘀血在于皮膚。宜開在表之熱。故日開表。

二日、行經。如頭痛耳鳴上氣眩暈風熱麻痺脚氣酸痛、則邪氣容于経絡。宜行在経之邪。故日行經。

三日、温動。如脾胃不和泄瀉不止痰喘吐衂血腸凡下血則病機既有成乎臓腑之中。宜温而動之。故日温動。

四日、徹底。如勞熱盗汗痃癖痞塊嗝噎胃狂乱癲癇、則病之所因深根固蒂非灸灼尤多而徹底、則不能以養其效。故日徹底。

［書き下し］

異人秘授五極

百病を治するに灸を五極（ごきょく）にし愈えざるは莫し。然れども病機の変、内外表裏の不一有り。故に灸灼亦之に四治の法有り。

一に曰く、開表。臁瘡の痒と為る、陰虫、破瓜、疥癬、殿風、小児白禿の如きは、則ち瘀血、皮膚に在り。宜しく表に在るの熱を開くべし。故に開表と曰ふ。

二に曰く、行経。頭痛、耳鳴、上気、眩暈、風熱麻痺、脚気、酸痛の如きは、則ち邪気経絡に容る。宜しく経に在る邪を行（めぐ）らしむべし。故に行経と曰ふ。

三に曰く、温動。脾胃和せず、泄瀉止まず、痰喘、吐血、衂、血腸凡そ下血は、則ち病機既に臓腑の中に成ること有り。宜しく温め之を動かすべし。故に温動と曰ふ。

四に曰く、徹底。労熱、盗汗、痃癖、痞塊、嗝噎、胃反し、狂乱、癲癇の如きは、則ち病の因るところ深根固蒂にして、灸灼尤も多くして徹底するにあらざれば、則ち以て其の効を養ふこと能はず。故に徹底と曰ふ。

［現代語訳］

異人秘授五極

あらゆる病を治療するにあたり、「五極」に灸を据えて治らないものはない。しかしながら、病気の機序（病態・病機）の変化には内外や表裏の違いがあり一様ではない。そのため、お灸の施術法にもまた四つの治療原則が存在する。

一つ目は「開表」。すねの潰瘍で痒みを伴うもの、陰部周辺の痒み、皮膚の裂傷、疥癬、癜風、頭部白癬などの病症は、瘀血が皮膚の表面に存在している状態である。したがって、体表に留まっている熱を発散・開放する必要があり、これを「開表」と呼ぶ。

二つ目は「行経」である。頭痛、耳鳴り、のぼせ、めまい、風邪の熱による麻痺、脚気、筋肉や関節の痛み・だるさ（酸痛）などの病症は、邪気が経絡の内部に進入している状態である。したがって、経絡に留まっている邪気を巡らせて取り除く必要があり、これを「行経」と呼ぶ。

三つ目は「温動」である。胃腸の不調、治まらない下痢、痰を伴う喘息、鼻血、血便・下血などの病症は、病態がすでに臓腑の内部で成立している状態である。したがって、温めて動かし、気血の流れを活性化させるのがよく、これを「温動」と呼ぶ。

四つ目は「徹底」である。慢性的な微熱、寝汗、首肩の筋の引きつりやコリ、腹部のしこり・腫瘤、喉の詰まりや吐き気、胃の乱れ、ひきつけ・狂乱などの病症は、病気の根源が深部に根を下ろして固まっている状態である。したがって、お灸の回数を特に多くして徹底的に据えない限り、十分な治療効果を修め発揮させることはできない。ゆえにこれを「徹底」と呼ぶ。

［原文］

年壮數、劉熙釋名曰、歳三十日壯、故知灸火三十灼謂之一壯。旧記曰用艾一灼謂之一壯、以壯人爲法也。其言若于壯人當依此数此説却非是、凡五極灸法謂一壯者皆當用三十灼也。

論艾葉。製艾、先如法令乾燥入臼搗之以細篩去塵屑。艾葉十銭和調、雄黄五分、麝香三分、毎入石臼搗取潔白、灸炷要廣三分。

定上極法。上極即大椎也。使患人端坐正面、以掌按椎骨、便屈伸低昂着、首頸而陥者、是項骨。不陥而夾起者、是上極此法捷徑易知。

五極灸法、便患人端坐正面、點上極以稈循背垂下到、下極即尾骶骨也。截去之以所量之稈折而爲二、一則截去、一則再自上極循垂下極左右各開同身一寸五分、是爲左極右極。以上五穴乃名五極灸。

［書き下し］

年壮の数、劉熙が『釈名』に「歳三十を壮と曰ふ」と曰へり。故に灸火三十灼をして之を一壮と謂ふを知る。旧記に曰く、艾一灼を用いて一壮と謂ふ、以て壮たる人の法と為すなり。其の言ふところ壮たる人においては当に此の数に依るべしとするも、此の説却って是ならず。凡そ五極灸の法においては一壮は、皆当に三十灼を用いるをいうなり。

艾葉を論ず。艾を製するには先づ法の如く乾燥せしめ、臼に入れて之を搗き、細篩を以て塵屑を去る。艾葉十銭に雄黄五分、麝香三分を和調し、毎に石臼に入れ搗きて潔白を取り、灸

灶は広さ三分を要す。

上極を定める法。上極は即ち大椎なり。便ち患人をして正面に端坐せしめ、掌を以て椎骨を押さえ、便ち首頸を屈伸低昂せしめて着け、陥む者は項骨なり。陥まずして夾み起る者は是れ上極なり。此の法、捷径にして知り易し。

五極灸法。患人をして正面に端坐せしめ、上極を点じ、稈を以て背に循い垂下して下極に到る、即ち尾骶骨なり。之を截去し、その量るところの稈を折りて二と為し、一は則ち截去し、一は則ち再び上極より垂下極に至り、左右各々同身一寸五分を開く。是を左極・右極と為す。以上の五穴、乃ち五極の灸と名づく。

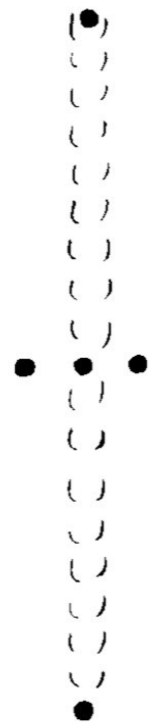
［現代語訳］

お灸の壮数（回数）について、劉熙の『釈名』には「三十歳を『壮』という」と記されている。このことから、お灸の火を三十回すえることをもって「一壮」と定義づけられたことがわかる。古い医書に「もぐさを一回燃やすことを一壮と呼ぶ」とあるのは、元気な人の一回分。その説では元気な人に対しては書かれた壮数に従うべきであるとするが、この説はここでは用いない。およそ五極灸の法において「一壮」と言う場合は、一律に三十灼（三十回お灸を据えること）を適用する。

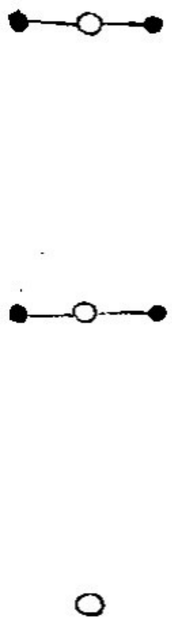
もぐさの精製法について論じる。もぐさを精製するには、まず規定通りに十分に乾燥させ、臼に入れてつき、細かい篩にかけてゴミや塵を取り除く。乾燥させたもぐさ十銭に対し、雄黄を五分、麝香を三分、加えて混ぜ合わせ、常に石臼に入れてついて清潔で真っ白なもぐさに仕上げる。お灸の底面の大きさは幅三分（約九mm）とする。

上極の取穴法。上極とは大椎穴のことである。患者を正面に向かって姿勢を正して座らせ、手のひらで脊椎を押さえ、首を前屈後屈させ、骨の窪みを確かめる。後屈したときに窪む部分は項骨であり、窪まずに挟まれて隆起する部分が「上極」である。この方法は手軽で分かりやすい近道である。

五極の灸の取穴法。患者を正面に向かって姿勢を正して座らせ、まず上極の位置に印をつける。稲わらを用いて背骨に沿ってまっすぐ垂らし、下極（すなわち尾骶骨）に届く長さで切り取る。その測ったわらを半分に折り（二等分にし）、片方は切り捨て、残りの半分を再び上極から下極に向けて垂らし、その下端を中極として、中極から左右にそれぞれ患者自身の同身寸で一寸五分開いた場所を取る。ここを「左極」「右極」とする。以上の五つのツボを、名付けて「五極の灸」と言う。

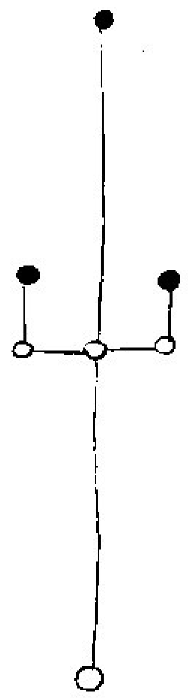


[原文]
病氣變不一、故灸之法亦自五極穴變化来。詳見後。
[書き下し]
病気変不一なるが、故に灸の法も亦五極穴より変化して来る。詳細には後を見るべし。
[現代語訳]
病気の症状や変化は一様ではないため、お灸の施術法もまたこの基本となる五極のツボから変化させて応用する。詳細は以下の通り。
[原文]
中風、癱瘓、口眼喎斜、宜温動
上極左右各開一寸五分二穴二壯、左極右極二穴二壯。
[書き下し]
中風・癱瘓・口眼喎斜は、宜しく温動すべし。
上極左右各々開くこと一寸五分二穴に二壯、左極・右極二穴に二壯。
[現代語訳]
脳卒中・半身不随・顔面神経麻痺には、「温動」を用いる。
上極から左右にそれぞれ一寸五分開いた二穴に二壮、左極・右極の二穴に二壮据える。



[原文]
頭痛、耳鳴、上逆、歯痛、宜行經。
上極一穴一壯左右兩極上一寸二穴二壯
[書き下し]
頭痛・耳鳴・上逆・歯痛には、宜しく行経すべし。
上極一穴に一壮、左右両極の上二寸二穴に二壮。
[現代語訳]

頭痛・耳鳴り・のぼせ・歯痛には、行経を用いる。
上極の一穴に一壮、左右の両極の上一寸の二穴に二壮据える。



[原文]

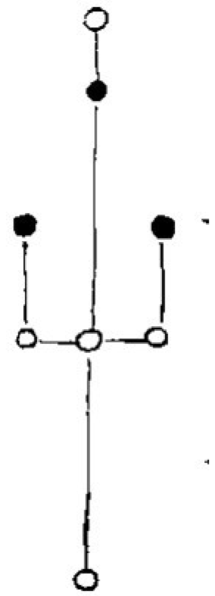
癰疽、瘡癧、生于頭面腹脇、未潰宜温動。已潰宜行經。
去上極下三寸一穴一灼、去左右兩極上四寸二穴二壮或十壮。

[書き下し]

癰疽・瘡癧、頭面・腹脇に生じて未だ潰れざるには、宜しく温動すべし。既に潰れたるには、宜しく行経すべし。
上極を去ること下三寸一穴に一灼、左右両極を去ること上四寸二穴に二壮或いは十壮。

[現代語訳]

悪性の腫れ物やデキモノが頭部・顔面・お腹・脇腹に生じ、まだ膿んで潰れていない場合は温動を用いる。すでに潰れている場合は行経を用いる。
上極から下に三寸下がった一穴に一灼(一回だけ)、左右の両極から上に四寸上がった二穴に二壮、または十壮据える。



[原文]

脚氣、酸痛、風温、麻痺而痿軟、宜行經。
去下極上一寸五分、又各開一寸五分、三穴三壮。

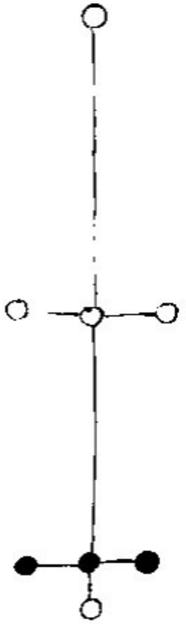
[書き下し]

脚気・酸痛・風温・麻痺にして痿軟なるには、宜しく行経すべし。
下極を去ること上一寸五分、又各々開くこと一寸五分三穴に三壮。

[現代語訳]

脚気・足の痛みだるさ・かぜによる関節痛・尿トラブルを伴う痺れや麻痺で筋力が低下して軟弱になっている場合は、行経を用いる。

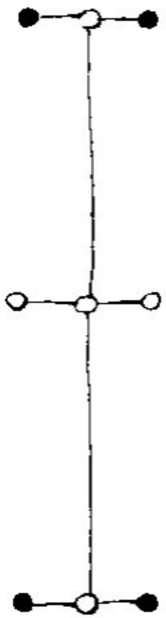
下極から上に一寸五分上がり、さらに左右へそれぞれ一寸五分開いた三穴に三壮据える。



[原文]
手足轉筋、動作無力、宜行經。
上極左右各開一寸五分二穴二壮、下極左右各開一寸五分二穴二壮。

[書き下し]
手足転筋・動作無力には、宜しく行経すべし。
上極左右各々開くこと一寸五分二穴に二壮、下極左右各々開くこと一寸五分二穴に二壮。

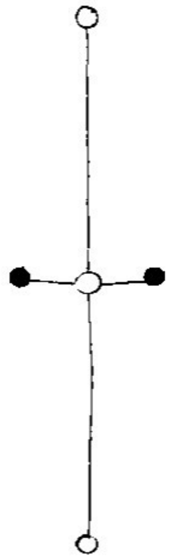
[現代語訳]
手足のこむら返り・手足の動きに力が入らない場合は、行経を用いる。
上極から左右へそれぞれ一寸五分開いた二穴に二壮、下極から左右へそれぞれ一寸五分開いた二穴に二壮据える。



[原文]
臁瘡、陰虫、疥痒、癬風、小兒白禿、及目胞鼻瘡皮膚雷生粟、宜開表。
左極右極二穴三壮。

[書き下し]
臁瘡・陰虫・疥痒・癬風・小児白禿、及び目胞・鼻瘡・皮膚に雷の如く粟を生ずるには、宜しく開表すべし。
左極・右極二穴に三壮。

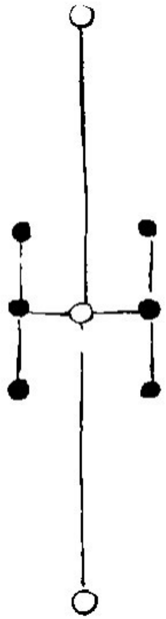
[現代語訳]
下肢の頑固な皮膚潰瘍・寄生虫による皮膚病・湿疹の痒み・水虫や乾燥性皮膚炎・小児の頭部白癬、およびまぶたの腫れ・鼻のデキモノ・皮膚に雷や粟のようにブツブツが生じる場合は、開表を用いる。
左極・右極の二穴に三壮据える。



［原文］
脾胃不和、泄泻不止、痰喘、吐、衄咳嗽、温動。
左右兩極二穴二壯、去左右上下各二寸五分四穴五壯。

［書き下し］
脾胃不和、泄泻不止、痰喘、吐、衄、咳嗽には、宜しく温動すべし。
左右両極二穴に二壯、左右上下を去ること各々二寸五分四穴に五壯。

［現代語訳］
胃腸不和・止まらない下痢・激しい咳や喘息・吐血・鼻血・咳には、温動を用いる。
左右の両極の二穴に二壯、左右の両極から上下にそれぞれ二寸五分離れた四穴に五壯据える。



［原文］
腸風、下血、痔漏、脱肛及婦人帶下、五麻、一切諸症屬於下、宜温動。
下極一穴、又左右開一寸二穴、又去下極上一寸一穴、又左右開一寸二穴、又去下極上二寸一穴、又左右開一寸二穴。以上九穴各二壯。

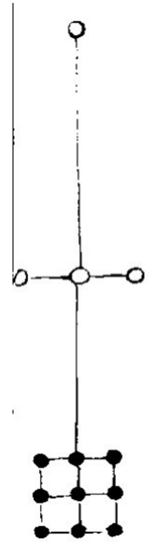
［書き下し］
腸風下血・痔漏・脱肛、及び婦人帯下・五麻・一切の諸症の下に属する者には、宜しく温動すべし。
下極一穴、又左右に開くこと一寸二穴、又下極を去ること上一寸一穴、又左右に開くこと一寸二穴、又下極を去ること上二寸一穴、又左右に開くこと一寸二穴。以上九穴各々二壯。

［現代語訳］
便血・痔の穴（痔漏）・脱肛、および女性の不正出血やおりもの・手足の痺れ・その他下半身に関する一切の病症には、温動を用いる。
下極の一穴、さらにその左右へ一寸開いた二穴、また下極から上に一寸上がった一穴、さらにその左右へ一寸開いた二穴、また下極から上に二寸上がった一穴、さらにその左右へ一寸開いた二穴（計九穴）に、それぞれ二壯ずつすえる。

[原文]
瘧瘡寒熱性来、宜温動。
上極一穴中極一穴、左右兩極二穴。以上四穴各五壮。

[書き下し]
瘧瘡・寒熱往来には、宜しく温動すべし。
上極一穴、中極一穴、左右両極二穴。以上四穴各々五壮。

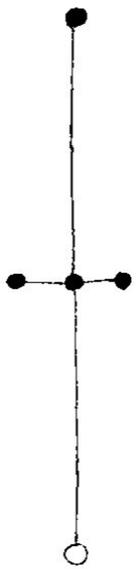
[現代語訳]
マラリアのような高熱と寒気が交互に来る病気には、温動を用いる。
上極の一穴、中極の一穴、左右両極の二穴（計四穴）に、それぞれ五壮ずつすえる。

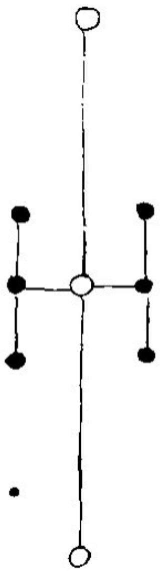


[原文]
痞満、腹痛、塊癖、上衝、宜温動。
左右極二穴五壮。去左右極上下各一寸五分四穴五壮。

[書き下し]
痞満・腹痛・塊癖・上衝には、宜しく温動すべし。
左右極二穴に五壮、左右極を去ること上下各々一寸五分四穴に五壮。

[現代語訳]
みぞおちの仕え・腹痛・お腹のしこりや腫留・気の引きつりや込み上げには、温動を用いる。
左右極の二穴に五壮、左右極から上下へそれぞれ一寸五分離れた四穴に五壮すえる。





[原文]
五癎狂癲年久不愈、宜徹底。
左右極二穴五十壮、下極一穴十壮。

[書き下し]

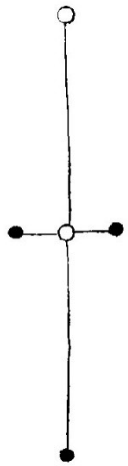
五癇・狂癲、年久しくして愈えざるには、宜しく徹底すべし。

左右極二穴に五十壮、下極一穴に十壮。

〔現代語訳〕

さまざまなひきつけ・てんかん・精神錯乱で、長年治らないものには、徹底（徹底的にお灸を据える法）を用いる。

左右極の二穴に五十壮、下極の一穴に十壮すえる。



〔原文〕

勞嗽、潮熱、盗汗不止、宜徹底。

上極一穴五壮、左右極上下各一寸五分四穴各二十壮

〔書き下し〕

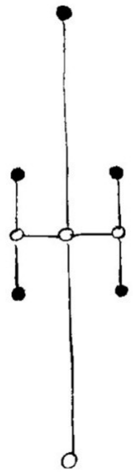
労嗽・潮熱・盗汗不止には、宜しく徹底すべし。

上極一穴に五壮、左右極上下各々一寸五分四穴各々二十壮。

〔現代語訳〕

慢性的な咳・熱の上下・止まらない寝汗には、徹底を用いる。

上極の一穴に五壮、左右極から上下へそれぞれ一寸五分離れた四穴に各二十壮すえる。



〔原文〕

嗝噎飲食不下吧吐呑酸怔忡宜徹底

中極一穴又去上四寸一穴左右極二穴各五十壮或七十壮痛則到不痛不痛則到痛

〔書き下し〕

嗝噎・飲食不下・嘔吐・呑酸・怔忡には、宜しく徹底すべし。

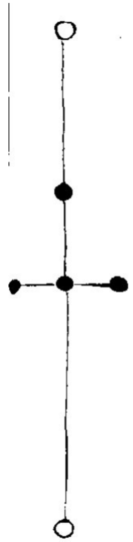
中極一穴、又上を去ること四寸一穴、左右極二穴各々五十壮或いは七十壮。痛めば則ち不痛に到り、不痛なれば則ち痛に到る。

〔現代語訳〕

吐き気や鬱滞・喉を通らず食事が下りない・嘔吐・胸やけや酸っぱい水が上がる・動悸や不安感には、徹底を用いる。

中極の一穴、さらにその上四寸離れた一穴、左右極の二穴に、それぞれ五十壮または七十壮

すえる。（痛みが強い場所はお灸によって痛みが消えるまで行い、痛みがない場所は痛みを感じるまで徹底的にお灸を重ねる）。



［原文］

打撲損傷、瘀血作痛、宜行經

左右極二穴三壯、去下極上二寸左右各開二寸二穴谷三壯

［書き下し］

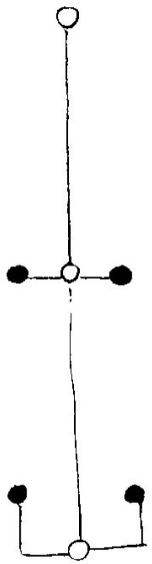
打撲損傷・瘀血作痛には、宜しく行経すべし。

左右極二穴に三壯、下極を去ること上二寸左右各々開くこと二寸二穴各々三壯。

［現代語訳］

打撲・挫傷・内出血による疼痛には、行経を用いる。

左右極の二穴に三壯、下極から上に二寸上がり、左右へそれぞれ二寸開いた二穴に各三壮すえる。



［原文］

五極灸畢

右後藤良山先生著述

［書き下し］

五極の灸畢る。

右　後藤良山先生著述

［現代語訳］

五極の灸の記述終わり

以上、後藤良山先生　著述